

3. 清正は朝鮮でなぜ鬼上官と呼ばれたか

清正は、朝鮮では鬼上官と呼ばれて、恐れられ、嫌われていたと言います。日本で伝えられる清正からは、想像できないことです。ここで注目すべきは、鬼「上官」と呼ばれていることです。慶長3年（1598年）10月の洒川の戦いで、島津軍は、明・朝鮮軍約5万人に対して約7千人で戦いながら、相手に約4万人近い損害を与え、鬼石蔓子と呼ばれ恐れられたと言います。ここでは鬼石蔓子（石蔓子＝島津）であり、個人または集団を鬼と言っています。一方清正の場合は、鬼は「上官」としての清正です。これから、清正は、指揮官として鬼＝悪者とされたと思われれます。

その原因は、3つ考えられます。

1つは、清正が朝鮮の2王子を捕虜とし、頑なに返還しなかったことです。清正は、漢城入城後、咸鏡道の支配を命じられ咸鏡道に向かい、文禄1年（1592年）7月24日会寧で現地人に囚われていた朝鮮人王子2名の引き渡しを受けます。その後清正はオランカイ（満州）まで侵攻しますが、女真族の抵抗を受け咸鏡道に引き返し、その後は現地義勇軍の反撃により、後退を余儀なくされます。そして、文禄2年（1593年）1月、漢城の朝鮮奉行（増田長盛ら）の命令により漢城に撤収することになります。その翌月の2月15日に明軍の参将が安辺の清正の元を訪れ、咸鏡道からの撤退と朝鮮2王子の引き渡しを求めています。清正はこの要求を拒否し、「たとえ明軍が40万の大軍で攻めてきても、ことごとく皆殺しにしてくれよう。そして明の400余州を灰燼とし、明皇帝を生け捕りにする」と述べています。このとき、小西のことを「堺の商人であり、明への道案内人に過ぎない」と述べており、これが小西の耳に入り、後に清正が帰国命令を受けることとなる小西らが指摘した清正の罪状の1つとなります。この後清正たちも漢城に布陣しますが、漢城の日本軍の食料倉庫が明軍の焼き討ちに会い、食料不足が予想されたことから、日本軍も和議に傾き、小西と石田三成が中心となって、明の交渉担当者沈惟敬と和議の交渉を始めます。そして明の和議交渉使節2名が名護屋城に渡り、秀吉側と交渉します。その結果、秀吉の和議7条件が示されますが、その前に小西は、明側の交渉者沈惟敬と謀り、配下の内藤如安に明が要求する偽造した秀吉降表を持たせ、北京に派遣します。

この間にも沈惟敬は、繰り返し2王子の返還を小西に要求しています。2王子の返還は、朝鮮側にとって最優先事項であり、明としても無視できなかったようです。

三成などの奉行および朝鮮在軍大将の宇喜多秀家も2王子を返還することで、明との和議がまとまると見て、秀吉に2王子の返還を清正に命じるよう働きかけたようです。その結果、秀吉は、2王子返還を清正に命じます。清正は、2王子を名護屋城に送る手はずだったようですが、その前に命令書を受け取ります。2王子は名護屋城から戻った2名の明使節とともに、文禄2年（1593年）7月22日釜山から漢城に立ちます。清正が2王子を確保（前年7月24日）してからほぼ1年後のことでした。

このように朝鮮2王子の身柄を日本側が確保していることは、朝鮮や明にとって大きな

弱みだったようです。朝鮮は儒教の国であり、国民には国王への忠義が植え付けられていますが、王子は国王の次に国民が忠義を尽くすべき存在だったようです。従って、これを人質に取り返還しない清正は、憎き大将＝鬼上官に思えたようです。

2つ目は、文禄1年（1592年）4月に朝鮮侵攻して間もなく、朝鮮側に寝返った武将の存在です。この武将は、清正軍の先鋒を率いていたようですが、日本側には詳しい記録がなく、人物は特定されていません。朝鮮側の記録では、「沙也加」と言う者とされ、その後朝鮮軍に鉄砲の技術などを教え、日本軍との戦いにも従軍し手柄を挙げたことから、国王から高い官位を下賜され、今でも朝鮮の英雄となっているようです。この沙也加の上官が清正だったことから、正義の味方の沙也加に対し、清正を悪人の上官に仕立て上げ、鬼上官と呼んだのではないのでしょうか。

3つ目は、清正の厳しい交渉態度です。明軍が漢城に攻め入った後、明・日本間で和議の交渉が行われますが、明・沈惟敬、日本・小西の交渉は、狐と狸の化かし合いの様相で進みますが、その途中から始まった朝鮮・松雲大師惟政と清正との交渉は、秀吉が提示した和議7条件を巡る真正面からの交渉になります。この7条件について、松雲大師は、「盗人猛々しい」と反駁を加えます。ここら辺のやり取りは、一国を代表する者同士の迫力あるやり取りとなっています。朝鮮としては、秀吉の出した7条件は、飲む余地がなく、交渉に加わった明の將軍は「秀吉に代えて清正を日本の国王に封じる」からと清正を調略してきます。清正は一顧だにしないのですが、これが清正の評価を一層高めたように思われます。

この交渉を知った小西は、沈惟敬との交渉を急ぎ、偽の秀吉の降状を明に提出し、明の皇帝が秀吉を日本の国王に封じることで合意し、残りは曖昧にして、明の冊封使が大坂に向かうこととなります。この間も清正は、小西らの和議に反対し朝鮮に駐屯する姿勢をとります。冊封使が日本に向かう条件として、日本軍の朝鮮からの完全撤退があったため、このまま清正を朝鮮においておけば、冊封使が日本に向かわない恐れがあったため、小西と三成は、清正のこれまでの失策を集めて秀吉に報告し、これを大義名分にして清正へ召還命令を出させます。その結果、明の冊封使が大坂城を訪れ、秀吉を日本の国王に封じる旨の誥勅を読み上げるのですが、その際に冊封使が「日本軍が朝鮮から全面撤退しない限り、交易は行わない」と話したことから、秀吉が激怒し、和議交渉は破断となります。秀吉は、明との和議と朝鮮との和議を別々のものと考え、明との和議では、恥を忍んで冊封を受けるが、朝鮮との和議は、当事者の交渉で決まり、朝鮮の領土を実効支配している事実が反映されるものと考えていたように思えます。

その後慶長の役が始まりますが、ここから秀吉は、清正を中心に明と交渉するよう命じています。それを受けて清正は、松雲大師と交渉を再開しますが、秀吉死去により日本軍は撤退します。日本軍が押しまくられている中で、現実的には三成・小西案で講和するしかなかったと思われますが、落とすところを探る交渉の過程を見ると、一国を代表して交渉する者の態度としては、誰が見ても清正の方が素晴らしい態度です。朝鮮側は、このような清正の態度をもって、敵ながらあっぱれという意味を込めて鬼上官と呼んだのではないでしょう

か。

(注記：本著の史実の多くは、「加藤清正 朝鮮侵略の実像」北島万次著 吉川弘文館に依っています。)